

歸郷

空鼻を啜りながら、藤屋の主人は豆洋燈に燐寸を擦って、チャキチャキと燧石を切った。ザアツと水を打ち撒ける音、バケツの把つ手が倒れてガラランと鳴った。それすら妙にあたりに響いた。朝は人の心も心の奥まで静かである。

流れる間に流れるのを遮ぎられて、雑巾水を其處だけ黒く通りに凍った。絞られたまゝに未だ湯氣の残つて居る雑巾とバケツを下げて、頭髮の延びた番頭は、通りの庭を薄暗い勝手と店の間の暖簾を分けた。ふと大根の實らしい味噌汁のにほひが鼻を衝く。

『おかみ様、戸矢部さんが中氣になりやしたと！』

容易ならぬといふやうに聲が重い。

『なにや、戸矢部さんが中氣になった……』

『はア、今、小林さんが寄つてさう云つて去ぎやした』

『おやおや、まづ』

勝手元で働いて居た内儀さんは、板の間につつ立つて赤くなった手を1巾半の前掛けで拭いて居る。

『どうしつぺ、まづ、可哀いさうになア』

『なんでも昨日俄に倒れたんだとかつて云ひやすけ、手も腰も利かなくなつたんだつて…』

『うゝむ』

内儀さんは爐傍に膝をついて居去つた櫓を繕った。

揚手拭ひの顔になつと赤く灯影がさして、チラチラと小さな炎が瞳に動いた。バケツを風呂場に置いて來て、番頭は圍爐裏の火に足の爪先を炙った。竹筒の附木入れを結びつけた煤けた自在鍵に、一升炊きの鍋が少々肩を曲げて、味噌汁がぐらぐらと煮えくりかへつて居る。

『何や……』

ふと小耳に挟んで此家の老母が口を入れた。佛壇に線香をたてゝ、鉦の音を澄まして、暫

く手を合せて瞑目して居る。

『戸矢部さんがどうしたって』

あるじ主人は拍手を納めて、煙管を持って、吹き落しのうづ高く盛られた火鉢の前に座った。

『戸矢部さんが中氣になったとい、昨日俄にだって』

『ほゝう、戸矢部さんがな……成る程そらア困る』

『戸矢部さんが中氣になったや』

老母は驚いたやうに言葉の尻をあげて、長火鉢の横座よこざの薄い蒲團の上に座った。

『中氣とは思ひがけなかったな、一躰いったいあんな人がなんのかなア』

『さうれな、仲間うちでゞも喰はして置くより外あるまいわ。何にしても大變なことになるわい。』

『小林さんが溢こぼして去ぎやしたつけ、昨日も今日も休業だつて……必と何でせう、代り番こに行つて世話してやつてるんでせう』

『いやみんなもなかなか大がいでねえわい、第一出商でられなくちやなア』

『可憐かわいさうに』

『一躰戸矢部さんの故郷は何國なんだ』

『茨城、たしかさうだと思ひやしたね、なアになんでも若いうちに家を飛び出したまゝ音信不通になつて居て、先方さきでは生きてるのか死んだものか知らないで居る位なんです』

『こんなことになんないやいゝがと思つてたんだのに、此頃は目もよつぽど悪くなつてたしね、家の前を通り越して八幡町角あたりから引つかへして來ることなどがあつたんだもの』

『何にしてもとんだことになったもんだ』

石川町通ひの馬車が、朝の町に浸み込むやうなラッパを吹いて、勢よく驅けて通つた。

『お巻、お巻、早くお汁鍋を下してくつりよ、煮つまるかも知れないぞ』

妹娘は張り切れさうな頬を赤くして、丸々とした手でやがてお膳を運んだ。釜の鏝には吹いたあとの糊がこびりついて居る。味噌の泡が岸によせて干乾びたお汁鍋には蒸氣が騰つた。

高窓の汚れた硝子から、隣の屋根の消え残った雪が汚く覗いて居る。

佛壇の線香は燃え盡きようとして、細い煙は花立ての、埃に見える南天の葉の間をさまよった。

鍋から釜から椀から、白い湯氣がゆらめき騰^{のぼ}って、汁を啜る音が暫く聞こえた。

♪ とうんとん唐辛子の子——

七色合せた山椒の子——の子

イエエ——甘い辛いはお好み次第

學校へゆく子供の足音が續いた。

終宵^{よっせ}鼠が荒れて居た。時には目の前ですら丸くい背中を鍋の蓋の上に現はして平氣な彼等は、闇には殊更人を恐れなかった。枕許を掠めた思ふと足の上を渡り越して、恰度鬼事^{てうどおじこ}でもして居るやうに駆け廻る。

『畜生！』と闇に苦笑しながら、すわすわする肩に纏ったものを引き擔ぐと、古毛布はたわいもなく腕にゆするあがつて、足袋を逃れた脛^{すね}に冷えびえと夜氣が觸^{さわ}る。啮^{かぢ}られて惜しいものもなければ、それを苦にして叱る必要もない。煩^{うるさ}いと逐^おふにはあまりに一人は淋しいやうな氣もした。松葉の燻^{いぶ}る爐^ろ傍^{ばた}に胡座をかい、粥を啜る朝から、カタコトと尾の長い奴が現はれて、人を馬鹿にしたやうな恐れるやうな、丸い黒い小さな目から、曾^かつて抱いた女の一人の名を思ひ出すやうなこともなくなつてからは、彼等の軽い足拍子は、眠られぬ時覺めた時の、たゞ一つの話し對手である。

ふと覺める。音もない。ぞくぞくする體から、鼻の先の冷たさはまた格別、瞠^{みひら}いても瞠^{みひ}いても際限なく闇は續いて居る。風の音——遠く——暗い野の遠い果てには黒い濤^{なみ}が荒れて居る。荒れて狂つて寄せて引いて、畝^{うね}つて續く其濤^{なみ}の末また遠く、煙のやうな眞つ黒い雲がむくむくと漂ふて居る。——カタカタと忍びやかに可愛い奴の惡戯、と思つた時ははつきりと我にかへつて居る。海などゝは思ひも及ばぬ山國の、野でもない小さな町の一隅^{かたすみ}に、破屋でも九尺二間は闇を劃^{かち}つて居るのだ。足をくの字にして縮めた體には檻^{らんる}樓^{ろう}が觸^しれて居り、下には破れ疊^しが一枚敷^しかつてある。其下には床がある。それからが地だ。まだまだ上には屋根もある。右の手の方は入り口の障子で、左は壁の崩れた押入れ、頭に

向いては大小を張って落ちるのを押へた壁が圍み、足に續いては壁一重隔てゝ仕事師夫婦が二人の子供を挟んで寝て居る。幾時か知らん——一番鶏がないた。さて今日は幾日だったか——十五日に保土原を廻ってからなんでも四五日は経った。十二月か、雪が降る雪が積る、^{すべ}迂る、凍る、えゝ寒い寒い。

かうして目が冴え切って、仕方なしに起き出して、落葉を燻べて煙草をふかした暁もあつた。

寒氣がしんしんと體にとほった。動けば風が潜^{くぐ}るので、凝乎として居るうちに、下になった手が痺^{しび}れ出した。見定めてそれかとほんのり見える障戸^{しょうじ}の白むのが待ち遠しい。思ひ出すまい思ひ出すまいと昔を葬るのに苦心したのも今は昔となった。思ひ出たとてそれが今の吾が身に辛くもなければ、たゞもう一日一日の遣り繰りにさへ苦心すれば事足りる身である。過ぎ去ったことや明後日^{あさうって}のことを考へるのは贅澤な話である。起きなければならぬ、喰べなければならぬ、商^{あきな}ひに出なければならぬ、そのならぬによつて體は操られて居るに過ぎないのだ。

松葉の残り少なかったのが少し心細かった。むらむらと靡^{なび}く煙りの中に、高目の鐵瓶を下さうとした時、鍵にかけた手が強張^{こはば}つて動かなかつた。はてと思つてうむと力を入れた。と同時に千本の手でもつて突かれたやうに我にもなく前にのめつた。しゅうとたつた灰神樂^{はいかぐら}の中に『失^{しま}つた!』と言はうとした口も重かつた。大變と思ふ間も遅^{すが}く縋^{すが}りあがらうと焦慮つても焦慮つても腰も足も手も働きを失つて、もがけばもがくだけ胸は裂^われるやうに動悸を打つた。人を呼びにも口が利けぬ——觀念して強ひて心を落ち付けた時、鐵瓶の湯が覆^{くつがえ}つてふすぶすと其處から臭い煙りだけがのぼつて居るのを見た。ほうと溜め息をついてあまりの思ひがけなさに暫く惘然^{ぼうぜん}となつた。

ぎしぎしと荷を擔^{かつ}いで通つたのは同業の小林と云ふ男、

『お早よう!』と外から聲をかけて、

『まだか——戸矢部さん』と其まゝ行き過ぎようとしたが、ふと呻くやうな叫ぶやうな聲が耳にはいったので、

『如何^{どう}したい、今日^{けふ}は』と荷を下してがらり戸をあけた。

唾のやうに精一ぱいの聲を絞って、爐の中に黒いものが動揺いた。

『如何した如何した戸矢部さん』男は草鞋のまゝ床に駆けあがつた。

『……………』刺子の手袋を嵌めたまゝの手に抱き起されてすっかり頭巾で包んだ顔を、『大變なことになるた！』と言つた積りだが、齒痒いや自分にもたゞれろと聴こえた。

町には洋燈店が二軒あつた。一軒を富田屋と云つて店の新しい方を藤屋といった。その擔ぎ商ひから身を起して今のやうな店にした富田屋の方には、子分といふやうな賣子があつて、市日の町の中や、三四里四方の近在に荷を擔いで賣りに出て居た。總領の娘に婿が來てから、久しく閉じて置いた蔀をあげた藤屋には馴染もなければまた其頃は品も揃はなかつた。しかし若者夫婦が心を合せて精を出した結果は、二三年のうちにちよくちよく卸に運ぶ小店なども二三軒出來、外から入り込んだ行商や富田屋に借を拵へた賣子などが、朝の出掛けや夕方の歸途などに、店の前に荷を下して不足な品を補つて行くやうになつた。其頃から藤屋では戸矢部といふ名を知つた。一年ばかり富田屋の賣子をして居たとのことであるが、其時は別に一軒を持って、新らしく入り込んだ賣子を二人ばかり、一緒にといふよりは寧ろ使ふやうにして同じ鍋の飯を喰つて居た。其二人からちよくちよく氣風者といふ言葉を耳にした。白眼勝ちな目、それを厚く蔽ふた瞼の間に深く刻んだ皺、説き出すやうに言葉は低く靜かだったが、負けるのは嫌ひ、知らないといふのは恥辱のやうに、なんでも人の言葉を打ち消した。恐らくまたなんでも知らないといふのはなかつた。至るところの風土や習慣もよく語つた。確に東京辯で市中のことは見るがやうに語るので、『東京にお生まれですか』と聞くと、

『いえ生れたのは下谷邊の近在ですが……』と言つた。一年と續かず三人は散々になつた。一人は女房を持って土地に居坐り、一人はまた旅から旅と渡つて行つた。戸矢部はこれも女を引き入れた。郷社の鳥居の前に小さな店を出した。其處で二人女が變つた。一生を通じて行末を考へたのはたゞ此一二年の間であつた。少しの貯へが出来たところからふと其氣になつて、寄るともなく寄りついた島に、身を入れるだけの貝をつくらうとした。併し螺の廣い空巢に棲み馴れたヤドカリは、自分の棲家をつくる煩はしさに飽いて來た。氣の利かない醜い女は不明になつた。さうなると不思議なもので、喰べさせるものさへ惜しく

なつて来る。減つたまゝに品物の殖えない棚に、目につく程埃が積つて、其時はもう女は居なかつた。仲間うちでは一番小清瀟こせいぱうとして居た服装がだんだん汚れて來た。さうして間もなく町の端づれの馬宿うまやどの馬小屋の、脇の小さな小屋に寢起きするやうになつた。

養子問題や何かで富田屋が混雜ごたついて居るうちに、藤屋ではめつきり手を擴げて來た。富田屋の賣子きまと定つた者はなくなつて、仕入れ元の違ひから、打で一錢二錢の高下かうげをわけて、大抵兩方へ出入りするやうになつた。藤屋で借りをこしらへては富田屋へ行き、富田屋に不義理をしては藤屋へ來る男もあつた。

そろそろ目が悪くなり出したのは此頃、戸矢部は夕暮れまで一寸方角を迷ふことがあつた。梅毒性——のといふことは自分でも知つた。折も折、近年同業者が著いちじるしく殖えて、勢ひ商ひの高が減つて來たので、卸し元に借りをこしらへないのが上乘であつた。

また霜が降りて雪が降りて木枯が吹いた。一頻り漬け菜の葉が流れた里々の池や小川こがはに氷が張つて壁に掛けた乾葉ひばに囊みぞれが横さまに吹きつける日などは、紙笠一枚にホヤ二三本位賣つて歸つて來る。道順の時には其足で藤屋へ寄つた。愛想のいゝ内儀かみさんは、歪こびつになつた赤銅の十能に、焚き落しを山のやうに盛つて火鉢にあげてくれる。小僧の揃へる笠三四枚やホヤの半打位はんだうを、店先に下した荷に結び付けて、乏しい縞の財布から小錢を掴み出し、それを火鉢の脇に、指先でさすり分けながら並べたてる、時には小僧に白銅か廿錢銀貨かを見分けて貰ふことがあつた。一日一日と目の悪くなつて來るのがわかつた。飽かず火鉢に翳かざして居る手に、鼠の喰つたやうな手袋が嵌はまつて、掌や指の先が赤く覗いて居る。十二月だのにまだ袷あはせらしい、と思つて内儀おかみは、取つて置いた老人としよりの着古しや、襟卷の古いのなんぞを恵ぐんでやつた。譯のわかつた女、話の面白い人と思つて居るので、藤屋の内儀おかみにかうされるのだけは喜んだ。たゞ店の小僧や、仲間の者なぞに、少しでも馬鹿にしたやうな口を利かれると、顔色を悪くして怒つたものだ。

『今晚は』と潜くぐりをあけて首が出る。照りかへしや硝子器の反射を集めて、宵から閉じ切つた店に満ちて居た光りが、ぱつと重い臉を射た。

『よいお晩!』と交つた聲が應じる。

パチパチパチと算盤の球が響いた。來る年の大小を刷るために、繪刷物の見本をひらい

て、あれのこれのと品評しなだめをして居た番頭の間に割り込んで、焼け爛れた鐵火鉢の縁から周章あわてて手を放す。仕入れの用はそつち退けのに、かうしていつもゆつくりと構へ込んで、帳合ちやうあひをやつて居る夫婦が、時々合槌を打ったり話し掛けたりするのを對手に、それを樂しみにいろいろな昔を物語つた。若い時に服役した工兵の作業演習の時の地雷火敷設、大隊長の目にとまつて褒状を貰つたことや、その時の怪我の跡だといつて額の傷を見せた。此道にまだ経験の浅い夫婦に、ホヤ製造所の内部の話もして聞かせた。會津地方を筆屋をして歩いて居た時に、或る田舎の警部と商ひの上から喧嘩をして拘留され、原籍照會の結果、欠席裁判一年半の宣告を受けた時の話は、恰度壯士劇でも見るやうに人々の手を握らせた。牢獄の中のことも面白く委しく物語つた。『人の見ることの出来ない處まで見て來ました。いゝ経験です』と笑つて、自分も其夜は自分の話に酔つて歸つて行つた。驅け出した餘勢が停止することが出来ないやうに、其折は西の國の港に隠れて居て、毎日の新聞で事情を知り乍ら、つひに日清事件の豫備の招集に應じなかつたので。

どうかして幾何いくらでも前の借に金を入れた時などは、内儀は錢櫃をがらがいさせて、ポストの脇の今川焼などを奢つた。小僧の居眠りを叱る聲に氣がついて、やうやう品を穴のあいた麻風呂敷に包んで歸つて行く。火氣に馴れた顔に、耳を切るやうな風は鋭く刺した、ところどころの檐ひさしを占めて居る今川焼きの角燈かくとうをぼんやりと眺めて暗い路地から暗い小屋に這入り、手探りに燐寸マチを擦つてそのまゝ冷たい床に潜り込む。サカサカと藁を踏んで、隣りの馬は時々戸板を蹴つた。

茨城縣猿島郡クヅカケ村戸矢部長太、辛からじてこれだけ聞き得た。引きつられるやうな口を廻していろいろといふのを判斷するのはなかなか容易でなかつた。澤田といふ、擔かつぎ商ひをしながら小さな店を盛つて居る男が、早速矢立てを抜いて手紙を書いた。今までの生活状態から發病當時のこと行商連中が毎日一人づつ交代で看護をして居ることも書き添へて、それに行商連五人の名をづらりと書いた。クヅカケ村ほんじの本字どうが如何してもわからなかつたので、表書にも假名で書いた。永年放浪して居たことゝて、兄か親か其宛名の人の生死おぼつかも覺束ない話だといふ者があつて、受取人がなかつた時には慥たしかに戻つて來るやうにとそれを書留にした。

これ等の人達の中には、元も子もなくただ其日其日の賣り揚げによつて喰つて行くといふやうな人もあつたので、一日を休んで猶其上一人の扶養を分擔わかたうとするのはなかなか苦しいことであつた。總代をたてゝ願つて來たので、富田屋でも藤屋でも快く幾分かを補助してやつた。かうして六日むいかばかり経つたけれども、クヅカケ村からは何の音沙汰もなく、若しやと思つた人も來ず、書留もまた戻つて來なかつた。連中はまた集つた。手紙の戻つて來ないのを見ると、兎に角家は其處にあるに違ひないといふことになつて、若しそれでも反響がなかつたならば、その時は役場に願ひ出るなりどうなりとて、一決いっけつして電報を打つた。電文に就いてもまちまちな説が出たが、遂に「キトクムカヘニコイ」となつた。

中一日置いて返信が届いた。そらとばかりまだ糊の乾ひない印紙を切つて見ると、
「ユカレヌシンデモカマハヌ」

人々は顔を見合した。三たび連中は澤田の家に會議を開いた。快復の見込みのないものを、いつまでもかうして置いては唯一人の爲めに多人數が干上らなければならぬ。返信が打てる位ならば滿更喰ふに困るやうな生活でもあるまい。戸矢部さんは讀み書きも可なりに出來たのを見ても、家は相當に暮して居るに違ひない、かう人々は思つて「シンデモカマハヌ」といふ無慈悲な言葉も、家を飛び出したまゝ十數年間といふもの、どんな事情があつたにしろ、一度の音信もしなかつたことに對して、當然の仕打ちとは思はないまでも、さして苛酷であるとは思はなかつた。送りつけられたなら籍のあるものを、まさか受け取らないといふやうなことはあるまい、その時には警察もある。かう理をたてゝ送りつけることに相談が決つた。

『喜びなんしょ戸矢部さん、茨城から電報が來たぞい、かうだ、ユカレヌツレテコイつていふんだ——ないまア貴方あんたも安心しなんしょ』

元氣な聲で小林といふ男があがつて來た。彼は殊更に躁さわいで見せた。歸るのは厭だと駄々をこねやしないかと、人々はそればかり氣遣つたのだが、たゞ利かぬ手を内懷にしたまゝ首を襟に埋めて黙然として居た。涙が一つほろりと膝に染しみたのを小林は見て居た。自分達の謀計を見抜いて居るのではないかとも思はれたが、兎に角大人しく云ふことを聞いたのを幸ひにして、其夜から二人づつ爐に火を燃やして番をした。若しや舌でも噛み切られ

てはと思ったからで。

藤屋の内儀と妹娘とは、お高祖頭巾と肩掛けにくるまつて外に出た。二三日雪のないかはり空風^{からっかぜ}が吹き續いて、枯れたやうな空氣に下駄の音が高く響いた。閉ぢ籠った夜の街に眠つたいやうな電柱が並んで、ところどころの軒下に荷車が淋しく横かつて居る。きそばの提燈、七福パン屋の屋臺店^{やたいみせ}、金鰐^{きんづば}の焼ける匂ひが鼻をうった。その前だけ燈^{あかり}のさして居る硝子戸の菓子店へ寄つて、二人は少しばかりブツキリ飴を買った。

『此處だ此處だ 必と』と娘は先にたつて溝板をがたつかせた。二三軒先の鍛冶屋に鐵槌の音がして、火花が時々闇に散つて居る。家と家の間の暗い間隙を荒土の壁に傳はつて進むと、畑らしい空地に三棟の長家の灯影が見える。

『此處だ此處だ』足場の惡い石ころ道を躓きながら來て、端の家に聞き馴れた話し聲を聞いた。

『今晚は』

爐^ろの火に胡座をかいて居た三人の男は急いで居住居^{いずまい}を直した。

『やつ これはようこそ』

娘は提燈を消しは消したものの、下駄の散らかつて居る庭に足を踏み入れたまゝ暫く上るのを躊躇った。

『はゝゝ まアおあんがなんしよつていつでも此通りだからなんだけれど、兎に角まアあがつておくなんしよ』

筵^{むしろ}の敷かつてないところには床^{ゆか}が見え、床の上では新聞紙の屑や板切れなどが散つて居る。炭俵が一俵と手桶が一つ、隅の方に疊が一疊あつて、其上に座つて居る戸矢部の脇に汚い長火鉢が見えるだけ、丸^まるでがらくたを片づけた小屋のやうだと思つた。爐の火だけは熾^{さかん}に起こつて居る。實際それでなくてはやり切れないからで、筵^{むしろ}を通して床^{ゆか}の下から風がすわすわする。馬小屋が夏の暴風^{あらし}に潰れてから、笑つて語つた馬の同居から、屋賃の出る此長屋にうつったのだが、それでも家かと思はれる程荒^{すさ}んで居る。

『オゝ 寒い寒い耳が切れさうだ』といひ乍らまた一人這入つて來た。

『や お内儀さん』とあがらうとするのを一人が、

『どうした藤さん、あの澤田さんは』

『うん隣りに居る。呼んで来っか』

『いゝや此處でも聞こえるだろ、おう、澤田さん——』

『おう——』

『なに此隣家の人がね お内儀さん、今まで仲善く暮して居たんだから、お名残りに俺が送って行つてやるといふんでね、恰度いゝ幸ひだと思つてさうすることに決めやした。ほんとなら我々が一人随いていけばいゝんだけれど、何を申すにも御存じの通り我々だつて稼なけりやあ喰えない身分なんだし……また……』

『いやさうですともい、これだけ届かせるのだつてなかなか貴方、容易なことでないんだから……そこは貴方その位のことは戸矢部さんにだつて不性して貰はなけりやならないわい』

『は、まアそれで生中見知らぬ人に頼むよりはと思ひやしてね、何しろ先方のことを見届けて貰はなけりやなりやせんからね』

『なんだ油がなくなつたんでねえか、不景氣な洋燈だなア』

澤田が這入つて來た。

『おゝ お内儀さん お寒いのによく……なんともまだお禮にもあがりやせん……どうも此度はとんだ御厄介をかけまして相澄みやせん、お蔭様でどうかかうか片がついて、今晚いよいよ出發せることになりやしたから……』

『いや皆様もなかなかお骨折でしたねえ』

『戸矢部さんもいくらか名残りが惜しごせう、聞いてみたら十二年になるつていひやすからね』

ぽつちりとして居た二分心の洋燈が、吸い込まれるやうにうつすらと暗くなつて來る。ほつ、ほつと瞬いた。

『油がねんだ油がねんだ』と澤田は振つてみて、

『困つたな、買つて來なくちゃなんね、錢はすっかりあれに入れちまつたしと……貴方一寸先刻の財布を……』と戸矢部の懷に手を入れようとするのを

『あ、いゝかい、こゝから出しときなんしよ、一合いくら幾何だい、二錢あつたら澤山だつぱい』
と内儀は財布から銅貨を掴み出した。

『さうですけ、すみやせんね何だ彼かだつて……それぢやあ……私も財布を置いて來てしまつたんだから』

『すみませんね、どら、俺が一つ行つて來つか、此處らで石油を賣つてるのは何家だ』と一人の男が起つた。

『さうだな、あ さうださうだ あの婆さま家げで賣つてらア』

『よしきた！』男は洋燈を其まゝ下げて身輕に出て行つた。

『あの婆アさまつてば先刻、いよいよ今夜お別れかいつてもう泣いてるんだ』

『戸矢部さんも此間まで水を汲んでやつたり何かしてそりア仲がよかつたんだぜ、二人とも風變り者だから氣性が合つてたんだなア』

爐傍を動かない二人は小聲にこんなことを話し出した。

『これはね、家の老人としよりの下つ着だつたんだけれど、寒さ凌しのぎにと思つてない、なアに随分極くなつたんだけれどそれでも下さ着ればわからないから……それからこれは少しばかりだげつと錢別のお印ばかり、何か喰べたいものでも買つておくなんしよ、それからこれはお巻が汽車の中でも喰べるやうにつて買つて來たんだから……』と内儀は風呂敷を開いて並べたてた。

『お内儀さま、さう度々して頂いては恐れ入りやす、先度せんどのこつてさへお氣の毒に思つてんですのに……』

『いゝえ、碌ろくなことは出來ないんだから……それから今夜お名残りに五郎を磯いその停車場まで送らせるから、あそこを通る時に一寸外から聲をかけておくなんしよ』

戸矢部は始終うつむいて居たが、目をしばたいて何やらそろそろ云つた。品代しなだいの貸しが一圓小ばしあるのを、拂ひもしらずに其上種々貰つては、と云ふものらしいと見て取つて、

『なんの貴方そんなことは……』と内儀は言ひ消した。

澤田は留めるのを聞かず財布から紙綴の帳面を出して錢別の高を書き入れた。帳面には戸矢部千治病氣歸國に付寄附帳と金釘流に書かれて居る脇に年月日と國の名町の名を書い

て洋燈行商連中としてあった。

『何も無いやうでもそれでも質屋に拂つたのが二圓と三十八錢ばかりになりやした。それから洋燈の品が少しばかりあったのは私が引き受けることにして、その代が三圓二十五錢、富田屋さんからの御錢別として金五十錢、外に古シャツ一枚と足袋一足、一圓が私の分として、五十錢が小林春吉、同じく和田瀧太郎、三十錢が齋藤貞藏、同じく三十錢也他伊勢藤次郎、二十錢が佐野與一、これは近所に居る篩屋さんです、十五錢と手拭一本坂本おせきさん、これは此家の大屋のおばあさんで……えゝと金員がべめて九圓と〇八錢也とかうですな、そのうち汽車賃二人分が三圓五十錢として、途中雜費旁一泊……どうしても一泊はしなけりやなりやせんからな、えゝ一泊費要旁途中雜費が三圓と充分に見積りやした、それに附添人の手當として……友達甲斐に送って行つてくれるといふんですけれど、まあ相當な日傭二日分の七十錢をやることに決めて、差引二圓足らずがまあ戸矢部さんの懷に残る勘定になりやす。お内儀様まあこれで差支ありやすまいね』

『いや皆様のお骨折で戸矢部さんも無事に歸られやすわい、御縁があつたらまた會ひやすべ、それぢやア 戸矢部さん お體を大切にしましてまた壯健になつてこっちの方へおいんなしよ』

『さうださうだ壯健になつてまた來て貰はなくっちゃなんね、なア戸矢部さん』と一人が景氣をつけた。

『九時二十分發ですね、そんじやらそんな時一寸言葉をかけてくれるように……五郎と磯に仕度をさせて置くから、ぢやアまあ 皆様よろしくお頼の申しやす、戸矢部さんそんぢやら——』

さつと勢ひ込んで來た風に、入れたばかりの提灯の火をとられた、深い暗碧の空に、星が碎けて散れて居る。

大屋の老婆は戸口まで出て車の影を見送った。

風呂敷に包んだ涅槃を蹴込みに置いて、膝の上には細かなものを纏めた風呂敷包みを乗せた。

同業者五人に篩屋^{ふるい}さんも交じって、富田屋の養子と藤屋の若い者二人の都合九人は、各手^{てんで}に毛布^{けつと}や何かをかぶって町端れの停車場に向った。

底本…「水野仙子全集」第二卷

初出…「女子文壇」明治四十三年二月

テキスト入力…小林 徹

公開…平成二十九年六月十三日

リンク…[水野仙子ホームページ](#)